2021年卒　卒業論文

NHK「連続テレビ小説」からみる「朝ドラらしさ」
―長期低迷期打破の狼煙となった作品から―

指導教官：高橋恭子

早稲田大学政治経済学部 政治学科
映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ

4年　樋口理沙

概要

樋口理沙

昨今のテレビ業界は、若者のテレビ離れ、また動画配信サイトやサービスの台頭による不況でその揺るぎないポジションを失いつつあり、テレビ業界全体で未だかつて経験したことのないほどの変革期を迎えようとしている。しかし、そのような状況下でも高視聴率を叩き出している、話題性の高い国民的長寿番組がある。日本放送協会（略称：NHK）の「連続テレビ小説」（通称：朝ドラ）だ。一体なぜ朝ドラはドラマ不況下においても功績を残し続けているのだろうか、また一視聴者として、朝ドラのすべての作品が好きだった訳でないのになぜ観ることをやめられないのか、という疑問から朝ドラの持つ独自の魅力、「朝ドラらしさ」に迫りたい。そこで本研究では数多くの作品の中から、朝ドラを長期低迷期からの脱却へと導いた『ゲゲゲの女房』、“朝ドラ史上最高傑作”と言われながらも朝ドラのタブーを描き波紋を呼んだ『カーネーション』を研究題材として取り上げ、視聴者を夢中にさせた「新生朝ドラ」に繋がる新しい「朝ドラらしさ」について、それらを含むシーンを対象にした分析を通して明らかにする。 第1章では、朝ドラ誕生の背景や朝ドラの歴史に触れ、「連続テレビ小説」という放送枠に関する考察を行った。第2章では朝ドラの歴史もたどりながら、いまの朝ドラを構成する要素を「女性の活躍」という視点で吟味し、それを踏まえて「朝ドラの王道ヒロイン」の変化を考察した。第3章では、行うシーン分析の手法と対象作品について紹介している。第4章・5章では、『ゲゲゲの女房』と『カーネーション』、それぞれで「朝ドラらしさ」を含むシーンの分析、考察を行った。第6章ではシーン分析の結果、そして過去作品との比較から「“朝ドラ的”な作品・ヒロインとは」という問いに答え、さらには朝ドラが我々日本人にとっての「共通体験・共通記憶」であると結論付けた。終章では、本研究のテーマである長期低迷期を打破したNHK「連続テレビ小説」の作品を対象に従来の「朝ドラらしさ」と真新しい「朝ドラらしさ」とはなにか、またその関係性に関する分析結果の考察、研究で至らなかった課題点を振り返り、最後に今後の朝ドラのみかたについて述べ、本論文の結びとした。